
マッド・ティー・パーティー ～主人公達のごちゃ混ぜ事件簿～

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マッド・ティー・パーティー ～主人公達のごちゃ混ぜ事件簿～

【Nコード】

N1709F

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

とある喫茶店に集められた3人の人物。それは起こりえない邂逅のはずだった……。3人の主人公の邂逅がもたらすのは、世界を揺るがす陰謀と、彼等に降りかかるトラブルの数々。果たして、彼等は無事にこの事件を解決できるのか！この作品は髭伯爵の書いた作品で行われるクロスオーバーです。ノリで書くことにしました。

ぶろろーぐ：「まだ始まってねえぞ。」（前書き）

コロコロさんに触発され、つい書いてしまいました。・・・何も言わないで下さい。

自分にしては珍しく、この後の進行について何も考えてないです。いやホントに。

意見・批評・その他なんかありましたら思う存分言ってください。ただし、俺の高校の友人は除きます。お前らは言わないでくれ。頼むから。

ぶるーぐ：「まだ始まってねえぞ。」

愛知県名古屋市、某所。

季節は秋。オフイスビルが立ち並び、スーツ姿の男性や流行の最先端のファッションに身を包んでいる女性達が引つ切り無しに混雑している都会。その裏路地にとある店が建っている。

名も知らぬ人々が無数に行き来する通りから少し離れている路地に入ると、一軒の喫茶店が目飛び込んでくる。

少々洒落た外見に余り大きくは無いにも関わらず中に入ると不思議と広く感じてしまうこの店は、『マッド・ティー・パーティー』と呼ばれている。

名前だけを聞けば喫茶店には似合わない雰囲気だが、その意味は「お茶会」なので、確かに喫茶店の名前とするにはいいのかもしれない。・・・意味を知っていればだが。

今日は平日。しかもお昼時を過ぎた時間のため、本来なら客が来ることはまずありえない。いつもなら、誰もいない店内にただクラシックの音楽が流れているまま時間だけが過ぎていくだけなのだ。

しかし、今日に限っては違っていた。

店内のカウンター席に1人、日本人と思われる青年が座っているのだ。

何故わざわざ日本人であることを確認したか。それは、青年の風貌が明らかに日本人離れしているものだったからだ。

まず目に付くのは、染髪したとは思えないほどに見事な金髪の髪だ。日の光が当たると、角度にもよるが僅かに髪自体が光っているかのように思える。

次に、全身を覆っている異様なまでの「黒色」の多さだ。

最近肌寒くなってきたとはいえ、まだ早すぎる気がする真っ黒な皮製と思われるロングコート。各所に金具や紐が付いており、何だか人並みを掻き分けようとすると引っ掛かってしまいそうなコート

だ。襟がしっかりと立てられている代物で、きちんと前を閉じれば顔の3分の1ほどは隠れる。

手には指抜きさされている黒のグローブをはめ、まるでこれから殴り合いでもするかのような感じを受ける。

ズボンも同じ材質と思しき皮製のズボンを履いている。こちらは両足の外側にいくつかのポケットがあり、意外に多目的に使えるようだ。

そして、青年の身にまとう雰囲気も異質だった。

ある程度近づかなければ気づくことは出来ないが、彼はつねにプレッシャーのようなものを発しており、まず常人ならばその圧力に気づいたらすぐさま離れていくだろう。恐らくは、信じられないほどの質と量の修羅場を体験し、長く物騒な世界に身を置いていた経験を持っているのだろう。

しかも、特に集中しているような素振りが見えないことから無意識の内に出しているらしく、正直たまったものではない。ぶつちやけ今この店に誰もいないのは、いつものことであると同時に彼が引き起こしているのかもしれない。

しかし、本人と言えば全く周囲を気にすることも無く、ただ静かにコップに入っているコーラを飲んでいる。・・・気にしても誰も居ないため意味は無いのだろうが。

誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。店員がたまに顔を見せる以外自分1人しかいない店内で、彼は少し退屈そうにコップの中の氷を鳴らしている。

その時、店の入り口が開かれ、来店を知らせる鐘の音が店内に響いた。

「え〜と、確かここだったっけ・・・。」

店内に入ってきたのは、青年よりも少し年が低そうな、少し不良っぽい髪型の少年だった。学校から抜け出てきたのだろうか、学

ランを着込み通学用と思われる鞆を片手に少年は店内へと入ってくる。

何気無く入ってくる少年に目を向けた青年は、その人物に見覚えがあることに気づくと、片手を上げて声を掛けた。

「よう。久しぶり。」

「！？ 健さん！？ え、何でここに・・・！」

声を掛けられた少年も、店内に居た人物が最近めつきり会わなくなっていた知人だということに気づき、驚きを隠さずに声を上げる。驚かれた方かというと、全く動じている素振りを見せずに苦笑を浮かべている。

「ま、多分お前と同じだろ。一応正式な依頼として来たんだがな。」

「・・・そつちですか？ 俺は叔父さんからまわされたんですけど・・・。」

「・・・あの人仕事してんのか？」

「・・・最近は何もしていないツスね。」

2人が同時に思い浮かべているのは、自分達2人がかりでも絶対に勝てない異常な戦闘力を持つと同時に微妙に変人な少年の叔父である。

因みに、同時刻少年の通う学校で用務の仕事を行っていた本人は、盛大な咳をしていたらしい。くしゃみではなく。

やがて、ため息を一つ吐くと、健と呼ばれた青年はちよいちよいと手招きする。

「んなどころで立ってんのもなんだろ。こつち来て座れよ。」

「そつちします。」

少年はそういうと、健の右隣の席へと座る。鞆を足元に置いてみると、カウンターの奥から店員とらしき人物が出てくる。その姿を見て、少年は危うく座ってすぐに立ち上がる羽目になっていた。

その理由は、店員の顔色がゾンビみたいに酷かったためだ。思わず音を立てて立ち上がり、口をパクパクさせて表情を驚愕で固めている。

店員は少年のそんな様子を気にする様子も見せず、黙って水を少年の前に置いてから、店内の奥へと消えていった。

「……すいません、喫茶店にアレは無いでしょう。」

「そうか？ 中々斬新だと思うが。それに一応きちんと応対してくれるぞ。」

「ゾンビに接待されんのは斬新以前に怖すぎです。」

しばらくそんな話題で少年が愚痴を続けていたのだが、しばらくして再度店の入り口が開かれた。そこから入ってくる人物を見て、今度は少年の方が驚きの声を上げる。

「真じゃんか！ 久しぶり〜！！」

「アラ？ 何で零時が……あと、その人ダレ？」

入り口の扉を半開きで開くの止めたまま、目を丸くしている真と呼ばれた少年は、零時と呼ばれた先に来ていた少年と同じくらいの年齢で、ボタンなどの細部が異なるデザインの学ランを着ており少し長めの髪を後ろで簡単に束ねていて、まるで尻尾のようになっている。

「知り合いか零時？」

「ええまあ……。ちよつとした縁でして……。」

「えつと……八神真です……。見習い魔術師やっています。」

「！へえ・・・成る程。」

健は面白そうに笑うと、席を立てて未だに入り口で立ち往生している真へと歩み寄り、手を差し出す。

「俺は平山健。職業は『何でも屋』だ。零時とはまあ・・・仕事で肩を並べた仲だな。」

「え？　じゃあ、零時が言ってた『何でも屋やってる先輩』って・・・。」

「ハイハイストップストップ。それ以上は止めような。」

さらりと自分の恥ずかしい話をばらそうとした友人兼弟子兼元仕事仲間の間柄の真を、一瞬にして真の背後に回りこんだ零時がスリパーホールドをかまして黙らせる。

「ぎ、ギブアップ・・・。」

「“ネバー”ギブアップって？　オツケー。」

真が真っ青な顔で明らかにタップしているが、それをにこやかにスルーしてぎりぎり締め上げている。手加減を全くしていない零時と、万力のような力で締め上げられているらしく速攻で力が抜けている真を見ている健は、口を押さえて必死に笑うのを堪えている。

「くくく・・・。仲いいんだなお前ら。」

「ええまあ・・・、一応俺がこいつに神滅流の手ほどき行ってるんで、それなりの付き合いがあるんですよ。」

「・・・・・・・・。」

健の言葉に苦笑しつつ返答する零時と、もう手を上げることすらできずに死に掛けていたりする真。微かに口から白い靄が出てきて

いるが、さりげなく零時が押し込んで戻している。まだ首を絞めているが。

「やれやれ……。随分と個性的な面子が揃っちまったな……。」

「確かにそうツスねえ……。」

「……ゲホツゲホ……。そんなに……。凄い……。面子なのか……?」

「そりゃそうだ。健さんは日本国内トップの実力だし、お前は世界クラスの天才魔術師じゃん。」

「んで、人のことしか言ってるねえお前は裏の世界で散々暴れまわってたじゃねえか。それ使って。」

健が指指したのは零時の右腕。正確には、実はとんでもない力を秘めている零時の義手だ。

「いやでも、普段はリミッターかけてますよ?」

「……この間、『実はリミッター壊れてるんだよなコレ。』とか言ってたよな。」

「うー!!」

「……ある意味一番危険だったろお前の……。」

隠していたやばい事実を言われてあからさまに動揺している零時を、最早呆れるしかない健がツッコミを入れている。

「……何か俺が来てから騒がしくなってますん?」

「俺だけだとう頑張ってもこんな騒げなかつたんだがな。」

「俺と健さんだけでも結構静かでしたよな。」

「俺は悪くないぞ。」

「いや知らんがな。」

やたらと騒がしくなっていく店内に、奥から覗いていた店員は、こっそりため息をついた。

この場に集まったのは、いずれもいわゆる裏の世界に関わっている、もしくは関わっていた時期があるものばかり。それも、1人1人が信じられないほどの実力の持ち主である。

かたや、かつて死者の巣窟と化した街から仲間とともに脱出し、数年の時期を経て日本最高の何でも屋となった人を捨てた青年、平山健。

かたや、壮絶な過去を背負いつつも、師であり叔父でもある人と裏の世界で暴れまわっていた高校生、鎖川零時。

かたや、兄とともに世界クラスの実力を持つ魔術師となり、普通の人々では解決できない様々な事件を解決に導いてきた高校生、八神真。

本来ならばこのような場所で交わる筈が無い3人が、何故今回に限り同じ場所に集められたのか。

それは、この後起きるとてつもなく強大な事件の前触れに過ぎなかったのである……。

ぶるるーぐ：「まだ始まってねえぞ。」（後書き）

作者：……え、勢いで書いてしまいました。

健：……最早いつものことだな。

零時：どうすんだよコレ……。

真：一旦書いた以上続けるんだろ？

作者：まあ……一応。

健：途中でやめるとか言い出したらGウイルス打ち込むぞ。

作者：言ってる傍から紫色の液体が入ってる注射器出さないで！！

零時：この後のストーリーもともに考えてないとか言ってるし、ホントにどうなんだ？

真：ロクなことにはならないんだろうな……。

作者：当然だろ！！書いてるの俺だぞ！？

健：もう俺は諦めた……。

零時：俺も……。

真：……えと、こんな作品ですけど、不定期で更新するんですよ。しく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709f/>

マッド・ティー・パーティー ~主人公達のごちゃ混ぜ事件簿~

2010年10月11日04時51分発行